

求諸故人續五百題





一具庵犬人撰

俳諧故人續五百題

江戸書林

萬笈堂  
桂林堂

人心不同猶如其面作俳  
句者亦復自南狹我所好  
以譏彼彼亦狹其所好以  
笑我至仇讐相視者非惑  
之甚乎予晚年慕蕙翁遊  
于松窓之間雖未能入其



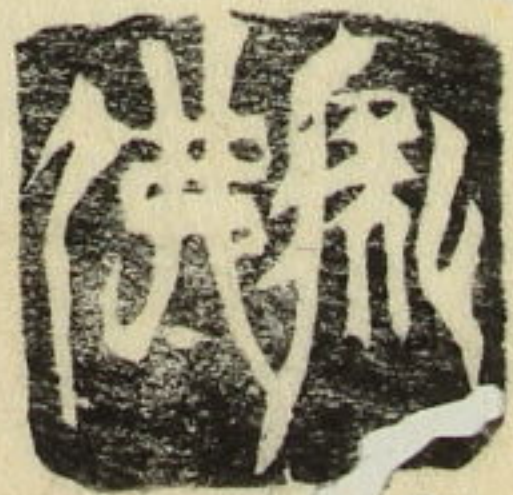
室、當雪工夫、殆費十數年、  
暇日涉獵諸抄、捃摭以為  
一冊子、聊以付尚友之義、  
近日書肆某乞、捧以行世、  
予謂此集一時隨聞見而  
錄之、約無一人之意、取捨  
或未盡其心也、雖然、寒、御  
僻地、晚生乏資者、置之於  
八上、則江山風月自在其  
中、亦不為無聊矣、松窓嘗  
曰、古人所好、一異其鱗、  
裁、苟能蒐羅、則可為大家、



也然則此冊雖小安知非  
其楷樣哉

文政己丑春正月

一具庵一具



元世十方空ニ書



も百様のしるはにたうあまの  
もふくいてりして大慶高橋と  
方すうたうもめすな  
句もてあまもまもまも  
けりいふもかーけれと昇平鼓腹  
の御代めもまもまも  
中にも帳臺の花の夕漁村に雪



此あやげはれ裁無とめらういし毎  
たもていしうぬ人かんあうりける  
ふりいれしと風雅の二字は眼とみて  
うられぬあまらうらふいし  
むとおもいらまあういすしりり  
一具菴主いふあふらぬあ  
らうらぬいしあけせうてあふさ  
らうらぬいし

るやいしあつて園子實拾て  
蕪葉子らめあまらうらぬいし  
此家事子らうらぬいし  
まらあふらちうらぬいし  
さうらぬいし  
いしあふらぬいし  
らぬいし  
らぬいし



画棟虹梁もろくろく人なはらふもな  
き準繩はらんも

文政己丑もつま

まららら日

大雲栗菴



古人續立百題發句集

春之部 日録

花 初丁 攝

二 壬辰 攝

三 八年 攝

歳且

元日	四	とん日	四	初かきみ	五	新玉	五
善夜初	五	壬辰後	五	こよみ	五	去ら	五
今朝の春	六	花結実	六	治代の春	六	福寿草	六
伊慶	七	門松	七	うらとら	七	いさごころ	七
たふく	七	蕎がら	七	書初	七	屠蘇	八
箱焚	八	太鼓	八	万歳	八	蓬菜	八



かみ餅	八	若水	八	年玉	九	中のとこ	九
水	九						

植物之部

子の目	九	小松引	九	七種	九	なごり	十
まじり	十	あふ菜	十	芥	十	梅	十一
折	十一	ととろ	十一	卜崩	十一	若草	十二
榎	十二	みゆ	十二	木のめ	十三	ろく緑	十三
落の落	十三	莖とち	十三	らあぎ	十四	すみれ	十四
ふんち	十四	はとじ	十四	めざみ	十五	木瓜	十五
芦角	十五	接木	十五	ろど	十六	茶はみ	十六
茶の茶	十六	種おや	十六	桃	十七	海棠	十七
連翅	十七	梨の花	十七	杏	十八	あや	十八

生類の部

木蓮花	十九	草むぎ	十九	苗代	十九	ろく	十九
若	二十	山吹	二十	はとじ	二十		
鶯	二十一	福この虫	二十一	白魚	二十一	らの巢	二十一
雀子	二十二	百子鳥	二十二	雉子	二十二	むさし	二十二
帰雁	二十三	乙多	二十三	駒鳥	二十三	らあ	二十三
麦髭	二十四	條	二十四	蟲	二十四	蜂	二十四
鯉	二十五	蛙	二十五	田螺	二十五	蟹	二十五
若鮎	二十六	飯鮎	二十六	流角	二十六		
時候大部	二十七						
佐保姫	二十八	ひんぎ	二十八	きさう	二十八	沐生	二十八
左義長	二十九	霞	二十九	おろ月	二十九	几中	二十九



教入	三十一	餘響	三十一	河川の	三十一	燒野	三十一
雪間	三十一	残響	三十一	東風	三十一	春風	三十一
雪解	三十一	春の雨	三十一	春の雪	三十一	春の日	三十一
春の夜	三十一	春の海	三十一	春の月	三十一	春の夕	三十一
春の野	三十一	春の空	三十一	水ぬるむ	三十一	海雲	三十一
海苔	三十一	寒食	三十一	草餅	三十一	陽冬	三十一
糸ひ	三十一	二日酔	三十一	初午	三十一	彼方	三十一
侍忌	三十一	混盤	三十一	兩行忌	三十一	永き日	三十一
出代	三十一	籬	三十一	鶏台	三十一	汐下	三十一
馬刀	三十一	曲水	三十一	畑らち	三十一	長附	三十一
いろは霜	三十一	峯入	三十一	行春	三十一		
通計	百五十二題						

古人續五百題

夏之部 目錄

生類の部

ほとぎん	初丁	閑古き	三	老翁	三	雀の鳥	三
よき雀	三	翡翠	三	羽やけき	三	鶴	四
水鶏	四	あし	四	水鳥の集	四	あし	五
かき	五	羽蟻	五	あまのり	六	蟻	六
あま	六	蜜	六	蠅	六	夏の虫	六
蚊	七	蚊をらす	七	蚊中	七	蝸牛	七
蟬	八	空蟬	八	麻の子	八		
時候之部							



更夜	八	あひせ	九	青簾	九	葵の葉	十
ほつと	十	卯月	十	皋月	十	あせ月	十
夏花	十一	夏書	十一	灌佛	十一	花浄堂	十一
新茶	十二	茶糰	十二	風呂	十二	みどり夜	十二
麦秋	十三	小角豆	十三	か川を	十三	鯨	十三
鱒	十三	のぼり	十三	粽	十三	豆蒲湯	十三
卯地うち	十四	競馬	十四	竹醉日	十四	五月雨	十五
入梅	十五	虎の雨	十五	ぬ月雨	十六	夏の日	十六
夏の月	十六	夏野	十六	夏山	十六	火串	十六
築らち	十七	田植	十七	早乙女	十七	早苗	十七
青田	十八	田草名	十八	あせぎ	十八	らちハ	十八
帚床	十九	帷子	十九	祇園会	十九	氷室	十九

雲の嶺	十九	あせ	十九	登森	二十	土用	二十
虫がし	二十	あせ	二十	夕立	二十一	簞	二十一
牛ぬく	二十一	まごみ	二十一	風之舟	二十二	うち水	二十三
とろろん	二十四	あせ栗瓜	二十四	沖鯨	二十四	清み	二十四
さし井	二十五	行ぬみ	二十五	夜瘦	二十五	川狩	二十五
秋近し	二十五	不二清	二十五	伊後	二十六		
極みの部							
郊の部	廿六	名茶	廿六	若楓	廿七	茶糰	廿七
実ほら	廿七	志げ	廿七	夏木立	廿七	下園	廿八
青嵐	廿八	茶糰	廿八	桐の部	廿八	ち好袖	廿八
夏柳	廿八	まごみ	廿九	標	廿九	栗の部	廿九
合歡の部	廿九	平復血子	廿九	志田の部	廿九	梅の部	三十



百日紅	三十一	燕子花	三十一	ほきん	三十一	芍薬	三十一
葵	三十一	苔のそね	三十一	けい	三十一	荊	三十一
牛の子	三十一	ゆき	三十一	茄子	三十一	あぶき	三十一
紅牡丹	三十一	夏菜	三十一	摺子	三十一	百合	三十一
たぢぢ	三十一	さうほ	三十一	藻の花	三十一	檜麻	三十一
紫陽花	三十一	萱草	三十一	あやめ	三十一	夕ぐほ	三十一
萍	三十一	河骨	三十一	蓴菜	三十一	蓮	三十一
蓮葉	三十一	おひびる	三十一	蘭の花	三十一	美菰刈	三十一
名作	三十一	林檎	三十一				

都る 百五十二題

古今續五百題發句集

春之部

花

あともらうくさひたてよ花の雨  
 あれつくとさうを花の芳きま  
 花をまふこの山風やとしはくみ  
 武蔵野もはより出てまき花の酒  
 目らうのや花よむせらるる山  
 花はうり山と日と海の朝はひ  
 らねとくめありとよさるる童  
 めさうりらとみやこの酒をうれ

貞徳  
 貞室  
 季吟  
 宗因  
 鬼貫  
 芭蕉  
 立圃  
 守武



花さうり子てあうらあ、まぬう子  
ちねよも毛虫よなうらー家様  
あう人あおにしくと花えんか  
ううくとまてんあえんの苗さ  
花さうりて死ともあいう病ひう那  
ちねよ一ねぬうや葛城うらまうら  
津あうや西行房りちねようせ  
首出して固のをえよあうひと  
あまてあうあう日あうてちねよ  
花さうりあうりて夢よりあうあう  
大佛うらうら花のけうり  
傍の袋あういさうりあうやあの中

其角 嵐雪 去来 大草 末山 正式 言水 荷兮 野坡 越人 路通 北枝

昆布物や花の氣のけうらあ  
酒あやあ琴の音せよ窓の花  
大峯やあう母の奥は花のを  
山やあね垣根くの酒をや  
あつじや肉う花見の初や  
朝あうの湯と斤勝や庭の花  
あうあひやあ花うりの物さ  
兄あうのうはあけうり花の時  
あうあうあうあうあうあう  
疱瘡のあたまうあうあうあう  
葉あうあうあうあうあうあう  
常あうあうあうあうあうあう

利牛 惟然 曾良 亀洞 杉風 孤屋 野水 荒彈 舟泉 筆本 今我 千那



あはけもや風車まわるる花のとき  
ささの山さささささ入てあまさん

薄芝  
晨風

櫻

鶴の巢も嵐の外はささささ  
あまのあまも櫻ささし生をつひひ  
櫻ぬきそらうくくとさるひより  
を鞭うひもれやうら山はささ  
かけみく降おまけけ櫻か  
林麓寺かくまぬりのいさささ  
殿を特の妻編るる櫻茶を

芭蕉  
其角  
秋風  
如泉  
支考  
李風  
嵐雪

足ぬとをさささささささささ  
一枝ハなさささささささ  
あちつきハ奥やさささささ  
雞の声もまきさささささ  
屋形も桜上時の櫻ちりさけ  
考の端は崩さささささ  
食の能えれあささささ  
櫻さささささささ  
さささささささ  
葛菟の名物とさ山ささ  
筆ふらして墨深櫻かささ  
あさりもせんさささ

杜幽  
尚白  
利牛  
凡兆  
杉風  
犬草  
野坡  
梅舌  
荷兮  
李里  
徳元  
重頼



# 初櫻

春初せよ芳野もまろく小江戸橋  
涉法座のそこめつるり伊勢橋

素堂  
宗因

温石のぬるぬる夜まやちのほくら  
七夕小契おきてしと川をく良  
小僧まろり上野谷中の初櫻  
歌ふ初ねはつちも出よ初さらら  
ち川橋え物のうらさ毎にせん  
供ふれもどりふこそよ是ち川橋  
人の氣もかく窺わし初さらら  
赤座や木ふりと更ほち川橋  
頬白の鈴ふるかよ初ええ良

露沾  
鬼貫  
素堂  
芭蕉  
去来  
去来  
沾荷  
沾荷  
園指

# 八重櫻

余良七主七堂伽藍八重櫻  
花垣や雲も和光の八重さらら  
ふてまははしくはまきん八重櫻  
八重櫻東も移る素良榮れ  
ふひてと道七重の纏を八重櫻

芭蕉  
鬼貫  
吉保  
沾圃  
幸和

# 遅櫻

万日の人仕ちりともや遅きくら  
さく花やこいの下まなほ遅櫻  
誰母そむに遅敷るおとさえ良  
紙屑やとろろくよあそ代えら  
はうぬもをまろりやふひうせの遅櫻

甚角  
鬼貫  
粘甫  
柴平  
常久



元日

元日やおりの人々ひー秋のくれ  
元日や月まぬ人のほーの音  
元日や漸く桐くくくらの石  
元日や土は桐うううは顔もせき  
元日も旅人を見る驛う南  
元日と明きぬーたる霞う船  
元日の木は間の競馬只ゆるし  
元日や夜ふくき衣のうら表  
元日やまきと片るうは梅のこね

芭蕉 其角 虎室 去来 沙徳 一笑 重五 千川 猿雖

ちの日

梅の香の初ふまよる初日うれ  
亀の脊ふ海老ほのめし初日山

支考 鬼貫

初雲

朝紅や水うくし初初かきみ  
枇杷の葉おたあやたううり初霞

鬼貫 斜嶺

新玉

鳥の愛西雨ふ玉の年とらうる  
あふままりあふままりる春日外

嵐雪 鬼貫 真室

着衣

愛ゆあひてきし綿やきを始  
母この紋あつじや着衣とーわ  
初うとくへらう墨の袖まをけけえ

宗因 山峯 卜く



初夢

はりのまや額ふあつは扇子よま  
ゆえ明て浪のりうねや泊瀬寺  
初ゆりや償名の橋は今のま  
らん夢のよきふたやとて日

其角  
嵐雪  
越人  
隈元

こよみ

下りゆふみりまのこよみうね  
伊勢磨みちれかくすてんふれり

徳元  
幽山

まゑ

らんらんや新年ふくるま五弁  
春まや星の中うら松の色  
年とまるとらん天の戸やあゝあを

芭蕉  
鬼貫  
正式

今初

の春

牽 たるるかろみのと初めのいろ  
哉多式う宿あもくやけさはま  
今初る春勇孫も有考も有撥を写  
刀さの供もつとろしりさのいろ  
伊勢浦やお木引体む今初るま  
けさのま海ははとありまのりら  
袖さうて松の葉繁るく初れをる  
くはの春寂しからる周の那  
佛より神をたろくまけさの春

守山  
貞室  
嵐雪  
正秀  
龍洞  
西柳  
梅古  
冬松  
と久

春の  
まゑ

二日あもぬりのせしな花のま  
穠る年や日もらとんけのむの春

芭蕉  
李吟



後代  
の事

おのろやの初折のむね  
まろ糸の多いとてむの  
ふれ人の手かたもかじ  
五十少て四谷をこより  
窺形てふ達しあても  
背くらおふりのをさせ

宗因 惟然 古梵 嵐雪 夫去 野章

昌陸の松とては手ぬ  
治とる氣やアんとて

利車 正式

福妻科

福妻科一寸めのは  
くま羽草やハ明この

言水 富丸

後慶

新妻の御妻のふ  
長松ハ製の名て

宗因 野波

門松

門松やうう海もわ  
らつ門の松こそめ  
門まつもかきゆる  
まう門や二入め  
門ハ松 芍薬園の

鬼貫 宗因 正式 徳元 舟泉

うら

山柴ふらう白す  
らら白もをこち

重五 胡及



標

ゆけりのちや次々小家の人かたり  
標の世阿弥まうりや青かたら

立圃  
嵐室

大福

大福くや淡路もみさん茶臼山  
大ふくやけりてきり江戸茶臼

鬼貫  
正安

齒固

こかこまやとん云さして水の恩  
齒固や鹿野の神代あくんやと

言水  
直良

書物

書物や行年七十掛洲の位  
少りややけりてきり江戸茶臼  
虫こりもまうりや鹿野の立さかこ

宗因  
其角  
貞室

屠菴

ととて酒ハめり玉露の小亀うた  
屠菴酒や武蔵舟も君り万喜盃

季吟  
正隆

雑考

さうふ考や五代の数くおかめを  
庭竈牛もさうふ考をとりまうり

とて  
其角

大著

大著や和泉の松木えいさうは  
ぬとくや右衛門の役村持とくえ

唯笑  
秋山

萬

まんさのやの富士の山表のけのま  
流れてきてふあまのせり万喜樂  
万喜のやを隣ふ明りうた

首雪  
一升  
荷兮

字云



蓮集

蓮葉の移ゆさるや芳根の春  
蓮葉よかけくかさや若れ袖  
蓮葉は山城密柑やみからし  
蓮葉や船の近れか入るを

其角  
太未  
維舟  
湍水

鏡餅

古きよ日ふとせとまの鏡餅  
いふややね一汁料の澆りち

宗因  
貞室

若

若水や九ふ年の清るを  
若水やふふうくさる氷  
若水をらちうけてる雪の掛  
若水舟懸のそは涼さ

風鈴  
武仙  
亀洞  
子角

白玉

年二とどれうもえ方  
ととととと古風をめく扇う

可夢  
徳窓

遺羽子

羽子板の繪松葉花ややとの春  
羽子板の遺羽子といひ子供うね  
をこ板の篇よりまは雪

季政  
満水  
吾仲

糸

生死れむう一男とと水らうひ  
とらがの森やうと許糸糸ひ

其角  
丁我

子れ日

松脂はた膏薬の子れ日  
腰にれ一子の日れ歌やしきり  
糸をれて糸もけとつる子の日

貞徳  
季吟  
貞室



小松引

押ひくやあねこのりる 姫小松  
加賀ふ小松引や越中か波とま  
引つとて松をくのゆは荒うを

宗因  
幽山  
其角

七種

七種をさるんらんさ手首う那  
七くさや跡母らめう朝かふと  
七種をたききたうりて泣子哉  
七るあや精ひあうけく切きさみ  
七くさる枯葉あ非あある草種哉  
七種次をやーさるや七ひやうー

嵐角  
其角  
俊似  
野坡  
泊徳  
貞室

薺

四方より門薺もきうりてあうお  
六日八日中も七日のなりるう利  
らあれきうて薺をきや神楽街  
一年の公拍子をなりるうれ  
風流つて石もさるる薺う系  
薺うお薺うらるをさる 蝴蝶  
草枕を門さる門人付といん  
まのお板お室ー薺の青あうく

芭蕉  
鬼貫  
舟竹  
無論  
嵐雪  
其角  
山川  
此筋

まの草

誰う家の薺ゆもあやまの草  
ひあうてんくさるまのうこ

鬼貫  
來山

春九



# 菜

隣はうらうらめひらるる若菜我  
 其の野はつくろふてぬるる菜摘  
 きくくくと雪付てこよいう形奪り  
 梅若菜よりこの宿のとうり汁  
 ころ菜摘ぬら木を割畠うな  
 うかれ雀妻よふ里の貂りう菜  
 一かふの牡丹ハ寒き若菜う形  
 ころ市やまふ小漕く梅いふ舟  
 霜を若菜に雪に樂むる若菜哉  
 精出して摘ともいふ若菜の都  
 吾うらも残してたうぬるる菜うれ  
 海をまふ若菜を出し梅若菜なり自

負室 鬼貫 来山 芭世 越人 其角 尾頭 嵐蘭 嵐雪 野水 素秋 素子

# 芥

我らあゝ鶴とこのことをせりの食  
 海山鷲芥梳はなう是の素  
 摘よりもえろ舟ひまるとる根芥哉  
 芥摘とてこけて酒なれたむさころれ  
 初麩やあ田の小芥うきを氷  
 芥はむや歩行一をまこめて切  
 名也けり芥の白根のかみぬら  
 地の底は雪川出と根芥の南

かゆく踏く川跡のころなめ那

小春

芭蕉 其角 亀翁 且蒙 定辨 野水 幽山 負室



梅

身自異らむ音も入梅のさうりこの素  
高嶺や海よりくれてうそのお  
に花根の梅ひらきさうり烟出  
梅も香や乞食の家ものさうり  
梅下りやさうりつてあつ梅のとな  
さうり形も梅もさうり月夜も  
病梅の庭よく梅のさうりな  
梅の急の気ふらさうりけしき哉  
かりつさぬ遊ふよ梅ハ教ふらち  
瘦義や作りさうりれの軒は  
さうりくふ咲さうり梅の  
日さうりの梅さうりさうりや骨牛屋

芭蕉  
去来  
其  
嵐雲  
野水  
曾良  
越人  
惟然  
千那  
野坡  
支幽

花白の梅もさうり双のこもさうり  
のりてさうり人の香もさうり梅の  
北面のえけひらさうりとのひえ  
星とりさうりさうり梅の  
梅一木はさうり草のさうり  
梅をさうりおのれ花もさうり  
白雲をさうりさうり梅の  
さうり折れさうり梅の  
あつさうり梅の  
梅さうり湯屋の  
梅さうり白の梅木のよさうり  
梅のさうりさうり白ひ

宗祇  
貞室  
季吟  
宗因  
露沾  
鬼貫  
竹亭  
鷗步  
万子  
利子  
曲翠  
來山



# 柳

ちれりの柳のさつるあひ人の那  
 下風よまうしてあうりのやなまきさる  
 池のあみとりのをいそくちあれたかき用  
 ちの日のを折せかりて川をそこふ  
 柳の子のを採るといひうさ日の月  
 沈み静ましかるまきちふ柳うけ  
 おりい出くりのあつかきま柳のま  
 傾城の賢あつたこのかきまう南  
 目あふ杖はくや柳のま  
 青柳のうらいてあさふ板戸うね  
 引よせてそましかみさる柳のま  
 何ともなくとるひやまきまう南

芭蕉 貞室 宗因 鬼頭 季吟 素堂 玄管 其角 嵐雪 去来 大草 越人

天をうりくやまきまなる柳のま  
 さうれく柳を風もとりはくう  
 よらと川柳とを流をまき柳のま  
 朝日二ふかちまきのうとく白ひま  
 こ糸のをもついでて枝一かちま  
 障子と一月のまひうま柳かま  
 町あつたあつた宿のやねたうま  
 せきまのの尾ハえはけさる柳ま  
 やふの雪柳をうりまきまうこの那  
 好く風雨牛のうまむく柳かま  
 青柳れあつたや鯉のまみま流  
 あつたへまきまもま一指まきま

小春 一 尚白 荷兮 湖春 素龍 利牛 杏雨 探花 春水



野老

とこふ 賣声 大糸のまじりひるの  
夢 毎ふらとや 野老や 市の中  
みおしくや 今も 丹波の 鬼と ころ

其角  
苔蘚  
真九

下篇

下 萌や 尾くそと ゆるの ところ 雪  
下 篇の 氣を けりや 其の 名

二片  
李由

若草

若草 十や きの みの 箭 足も 木綿 袴  
けう 草 小 ちの 川 祢 子 子 子 子 子 子  
立 白 小 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子  
つ づ づ づ づ づ づ づ づ づ づ づ づ づ  
若 草 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

野角  
野坡  
龜助  
問津  
良俊

椿

うらひまのらまおとーる椿あな  
曉のはく入みおつはつとらきう那  
藪ふくく鯉まのけくね棧のあ  
鋸ふかふまめんはくく花つとらき  
ちり玉の露まきんつくけりま北  
校るく伐らぬるをを棧のな  
ちり椿あまのりりさうま續てくる  
取あけてるや椿のあそのあな  
徳の枯くきふとあまきつとら我  
口紅のちの花ゆるくまはつらま  
土とらふ羅ふちりぬつとらたのち  
飛入やかの海底の玉つとらき

芭蕉  
荷兮  
卜枝  
嵐雪  
車茶  
湖春  
野坡  
洞木  
残香  
鬼貴  
孤屋  
宗因



紅梅

紅梅ハ淮ふ道一音の深小袖  
梅や紅人のけをむの初のみ  
紅梅の教や仙家お庭の雪  
お梅やえぬ世はく玉を  
紅梅やかの銀閣寺やふれ垣  
紅梅や比丘より劣る比丘尼寺

立圃 鬼貫 元 芭蕉 泊徳 蕪村

木花  
芽

ちやされくさぬ梢も木の芽哉  
木の芽くさる雀かくれやゆひあり  
られくも去年の残穂の木の芽  
まのめまて四寸をさるれ芽をさる

露川 均水 野蝶 玉鞅

若緑

のちやうく神の連枝のうら若  
くみより神のくぬ松ひねくれと  
黒くとの芽のくさるやまのつと

鬼貫 末山 土芳

落の  
塔

駒とたて雪えは僧ふ落の塔  
踏まらく出塚の切目や落のくさ  
生てぬ落のくさる山路うな  
その白ひ紙燭消てもぬきのたう

其角 拙候 即章 調竹

莖  
草

莖くさるやむ篠あつりくま妻りの  
さつたりそ莖くさるくさる明中ま  
酒賢く人莖くさるの園ふかれや

百聖 野徑 一露



五加木

冷やてものまややくていりませ五架飯  
うこき垣とやこの客をのそきりり

鬼貫  
儿董

す  
み  
き

何のきもはるぬよ去手の草う角  
糸うじと馬あいのうね草草  
おりのけふ松の葉うらく草うね  
草叶小橋あふひーあとやこれ  
法度場の垣より内へさきと我  
茶新くすすこれえり知と童か  
堤よりあうい落れぬすうれいの  
松うけもさうく硯のそととこが那  
とうねるもりの舟まきね草松

忠知  
荷兮  
夜章  
曲水  
野坡  
鳴歩  
馬菓  
如負  
その

報  
料

らんあめさのてらわな日なふ武  
教草やうそそそのまうたきはくこ  
あんけい、の物しこの日そ併の壁

普松  
泉春  
衛門

は  
び

まこくと橋やはまうはくし  
はくし頭巾にくるむおのより  
まこくと親子はみりつし  
春雨もたきおたり土筆  
まこくと案山子のけろと土筆

其角  
音江  
舟泉  
元志  
蕉筆

刺

行蝶のとありのとまねあことうね  
をらうこの野辺のあふみや隠形鬼

燭遊  
三丸



木瓜

草豆蔻や野ハのくろく木瓜のむ  
かけろくの底で焼くや木瓜のむ

銭蓮  
芦文

芦角

ゆじさへんくろの角とを濱の芦  
はのくろくやろく角の鬼のちり后

路通  
勝重

接木

捨物小梨の接穂や山をき  
はま下のかくしう穂る接穂  
世の中をきこんかまもね接木  
長れまや接木ハとねの咲かき  
一方と梅さく穂の接木この南

芭蕉  
傘下  
淳兒  
靖門  
越人

獨活

空間より落葉のうしろ  
せりなをたすハ瘦ありの独活  
いとゆめ白ひまきのくせはくろく

芭蕉  
嵐雪  
配力

茶摘

うたよまて落葉のくせはくろく  
柴舟の里ハ茶摘の水けり  
藪の根やあけりゆり生と茶摘  
あつまきや茶山あふりあつれ  
たうの尻もろく日とろく茶摘哉  
旅人の一茶あちまる茶つこく

鬼貫  
其角  
去来  
正秀  
玄茂  
杏西



菜  
けい

菜の花や一本咲くまののり  
山女の雲菜れをのりから  
なつをのり小枝を角なり  
菜の花のけいをけいけい  
なつをのりけいけいけい  
けいけいけいけいけい  
けいけいけいけいけい  
けいけいけいけいけい  
けいけいけいけいけい

宗 因  
芭蕉  
其角  
傘下  
園水  
長虫  
清洞  
不悔

種  
く

種や天気定めて種おろし  
古河の流を引くたねおろし

其角  
蕉村

桃

我友も伏見の桃のきりくせ  
菓子もさしけいけいけい  
おのくの桃のけいけいけい  
ひるふゆのけいけいけい  
おのくのけいけいけい  
桃柳のけいけいけい  
けいけいけいけいけい  
日の入や舟も見てけいけい  
金柑のけいけいけい  
梅ささけいけいけい  
角菜のけいけいけい  
梅のけいけいけい

芭蕉  
其角  
嵐雪  
桃隣  
傘下  
羽紅  
鳥巢  
一髪  
今我  
水鷗  
鬼貫  
貞室



海棠

海棠の花ハこらこり夜の月  
海棠ハ女部と猫とかあらね  
海棠の花ハ不ぬる花ハ丸麻子  
海棠の花のうつやおちる月  
海棠やおハッちちお堂のち

善船  
卜宅  
豊重  
其角  
史邦

連翹

れんきやうや茶よ山吹を捨さる  
連翹や柳ふあふふ牙咬み  
とんまやうの白ひくく庵の風味ふ

巴静  
麦兩  
峡水

梨の花

はつりこ人のまわりまりのとな  
志のころと高毒に似たり梨の花  
長山やほおほ瀧うほそりお花

鬼貫  
許六  
野童

杏

ちりりりりり杏のまるの  
杏はとほやせあけのトかまへ

貞徳  
暮四

辛夷

風紅もこえとこあーの花なれを  
ゆふくれの鳥ふりりるさあーうね

羽長  
梅車

木蓮

あ人の葉せんをねん天目ねんけ  
物いねね花やりしく木蓮んけ

貞田  
安齋

小麦

草ひきやひをりか上はあれり  
うさまの奥ろひるり雞の夢  
一朝は一はあうけやまのいら

鬼貫  
治後  
春水



# 苗代

苗代よ老のちうとや尻とととき  
 ろろろや府匠のぼる畔傳ひ  
 迷うらん苗代ころの田ね移まを  
 苗代や八き垣伝くる出雲織  
 人形かかろろまのりもたてみ形  
 苗代よまろもかかろの奇の種  
 なるろろや此土をかへて隅田川  
 晴道やろろの村の角大師  
 ちとくや苗代まあふあろる 風  
 苗代や伝居人行てまを伝え  
 ろろろや靴るの襪ちろあろり

嵐雪 牛角 水花 木也 元春 徳二 資仲 正秀 仙化 鬼貫 荻村

# 蕨

蕨や海谷の雪ふふととろろ  
 里人と相まろととろろや独活ととむ  
 菜刻との上手と扱る蕨この有  
 ちんらんや久草のまろり山ちん蕨  
 とろろふまをまけまろるわいひや

負産 宗因 其角 幸順 勝政

# 藤

関こそて愛もあしとととき我  
 白髪と砂味あまはととと常お  
 小坊ろふ足なけかろん松よ藤  
 風かくて静とときとろりあちのむ  
 蕨の棚やとととむ人のまろねや  
 松よ蕨鱗木おのぼるけととあり

宗祇 其角 嵐雪 杉風 負室 宗因



山吹

こころも春の居の夜のはちと哉  
とて世と夜小深と一墨ころも  
山藤のめとのゆくみ成机の南  
あつらかく岩うらや夜のをま  
夜やた君もふれふるををれ

荷兮  
宗派  
去来  
丈草  
その

山吹やまふささき枝のやを  
月雪ふ山ふき花の素敷よ一  
山吹の夜ハ黄令の肌志の南  
やまふれや垣ふ下くる藁一重  
一きうと山吹のそく夕陽うぬ  
山吹もちるう糸糸の舞さすま

芭蕉  
そ角  
季吟  
閣指  
襟雪  
酒堂

ほし

りのたて山吹のそく岩根の南  
山吹と蝶のまきれぬあじうね  
やまふささきやた久て流る花の水  
山吹やさうて樹ハあゝのそこ  
やまふささきやた久て流る花の水

蓬両  
ト枝  
貞室  
鬼を  
半残

花とそおひふどりく赤はくし  
裾山や虹吐くあゝの夕躑躅  
亦これより木を一目のつじろね  
白ほしすほくやうりの角と櫓  
手一さのいひさのわさやつー山  
さーのそく窓へはくーの日足る

宗鑑  
芭蕉  
共角  
嵐香  
去来  
丈草



けしきくらしやうき石燈籠  
山つじ流るるよとや夕日か  
るるしけ。浪白しきまつしお  
花さけのるるまもや岩はけし  
あつじよつじの露や羊の乳

桃隣  
智月  
水花  
幸茂  
負室

# 鶯

鶯ふ感あつけのまやし  
うらひとや氷もぬと多と朝日山  
英もや茶の木細の影月夜  
うらひとや月のもまひの群る  
鶯のけつとととえれしとや  
うらひとやの雪もさきと垣根

芭蕉  
其角  
丈艸  
去来  
嵐雪  
一桐

うらひとややとや一声のま  
鶯のや空もふと急なうら  
うらひとや数よまてうら  
鶯のや門のうらく豆腐うら  
うらひとや吸こちとあしと  
鶯の二足よなり月とけつと  
うらひとや声ふ起りてめか  
うらひとやのまやつと雪の  
梅をや鶯のうらおせうそ  
うらひとやましとまや新玉  
鶯のけつとととととととと  
鶯のけつとととととととと

溪石  
魚白  
欽枝  
野坡  
梅舌  
心圭  
桃隣  
桐  
山川  
夢々  
一笑  
惟然



うぐひさやまの丸おしる声のしら  
うぐひさの梅の小枝よ葉真としく  
黄鳥や國柄は翁の笛のま子

字因  
鬼貫  
負室

# 猫

の

ま飯おやんやゝ感うほこのはま  
うき友にのりて猫のそらなうめ  
深窓の頬も紅うやひさう猫  
葉巻をくろえて猫のねりう船  
已う脊尻をうらむさうりかへ猫  
なれも感猫よ伽羅焼てうれり  
足跡を妻とくふほとや雪の中  
誰れとも柳うらゝを鍋め致

芭蕉  
去ま  
團指  
牛寂  
秋色  
嵐雪  
其角  
沾徳

# 白夷

猫のときあつひの貝や尺おそひ  
うき恋ふたんでや猫の盗くひ  
のら猫やうかれゆくと秋の中  
うきあひ濃葉射分の心つけ猫

琴風  
支考  
之卓  
野徑

白夷小價あつそらうみなま  
あつ夷や漢菘う菘まあひるら  
あつ夷の紺あつるのよ水の泡  
白夷のあき白ひや枝のはし  
あつらややあふかへ細しま  
ふらをの骨や式船う大江やま  
白夷や目まで白魚目へ思夷

芭蕉  
其角  
負陸  
之道  
拙候  
荷兮  
鬼貫



鳥の巣

雀の子

百子鳥

巢をとりあさるや世とる一造能  
 巢かくらやあまはららの考のよき  
 巢をまーもや子あはれあまを  
 鳥の巣よ去年のきおき花の声  
 人あぬけ人あ訓けり雀の子  
 蠅らちふなまをすめの子あうね  
 荷鞍ふひまのさくち縁の先  
 日の新やこのくの上の寝すは  
 鳴やあふ教るふね村を  
 ちもといと年の冠の百ふ鳥  
 玉子鳥都、別の日和の南  
 川上の橋々梅のりちとて

昌房 之次 一雪 鬼貫 鬼貫 河瓢 土芳 珠碩 宗因 泉貫 山白 其角

雉子

父母の志きりふ鳥一雉子の聲  
 人らとし雉子をさるはあ犬の声  
 鶏のをひかたらん雉子は 雛  
 何のをあま新そ福らひく雉子の照  
 下塗の声さをあらん有部雉子  
 高声よはらとあらひる雉子うね  
 おりひ子とあるよひり雉子の声  
 行かると端繩としてる雉子うね  
 身ふまひお空向の雉子れみとり武  
 一まもこ声もるうぬまきとる即  
 らつくしやまふむ科のなたまに  
 ゆくしちのあてくしきや雉子の声

芭蕉 今角 夫未 丈草 嵐る 一雪 千那 塩車 撤士 衛門 言水 鬼貫



# 雲雀

雲雀よの上小母さくら峰のま  
 あふのまよひ路をえん跡の雲雀の  
 朝こそふゆのむらりく玉根のそら  
 追ふくく 驚くせけり夕むくく  
 羽あらけいくへの雲ふくく雲雀  
 枝の本を定規玉のゆる雲雀う羽  
 帆村らのせこりめりひひりひ  
 りあもまよひ障ふる日を清く  
 葉摘のゆるくおらるる雲雀の  
 口とくく雲ふかけゆるひそり  
 彩虹やあふひひりひのちりり  
 筆よ入るくくく浦へあふる雲雀

芭蕉 除風 文草 翠袖 滑橋 氷花 其角 如泉 言水 梅盛 素堂 宗因

# 帰雁

そのまよひも北の帰雁の山路の南  
 あふれやあふれかかふるる雁  
 ゆく雁や霧もをひきの島かき  
 雁啼てりのおあらしや霧の  
 小田久さを鉄も柱やのとほ雁  
 かふる雁 帰るとい 絨る勢ひなり  
 立さわく今や紀の雁いせの雁  
 行雁あさくら下まきほけくよし  
 まてや雁をれて周防の雁りけ雁  
 めくくを田螺ふらひてかふる雁  
 かふる雁 富士の裾田の砂ふる  
 うる雁 田毎に月の曇る夜ふ

貞室 鬼貫 水哉 未山 其角 嵐雪 以雉 凡峯 楓子 子英 長雅 蕪村



玄鳥

簾よ入りて美人小唄う燕の  
影多ふ裏ハはるあのかうひ  
あそふともけりともあそふね乙多  
傘の糸ららかさうよね乙多  
はるらとの雁も回てや鳴まのこ  
英賢よま出されしはるめうね  
いままことといわねりのま多  
燕や田とりかんと馬のあと  
巢の中や牙と細くしておや燕  
かろけりも下移るものつらめう  
土車引も休むはるめか那  
船綱よゆるはる仲の乙多うね

嵐を  
凡非  
去来  
其角  
丈草  
嵐彈  
俊似  
野童  
峯嵐  
桐兩  
舟竹  
巴山

駒鳥

琴いねの巢もこころはるめ  
志傍のま炸然とる道し燕う  
ころ細みあそふつらめう  
こはるのまお似合しき白銀  
朝あけや人見をそめて弱多の唱

枕舟  
合志  
小春  
長虹  
捷花

鸞

鸞のたぐや赤襟うめと日影  
機木ふらうらこのまや士屋  
花の雪はるまやうその琴の音

園指  
三章  
山只

麦鷄

麦鷄くき及むよとまはるは  
あゝとなく鶉よまの夜明う奈

沾袂  
颯竹



蝶

蝶のとぬとりの野中の日影うね  
移る蝶よるくまゆとさるこころを  
らめ蝶と兒のふん出をなまひる青  
蝶の舞あつる様ふらふら ねんか  
とほりても 類とらこく 胡蝶飛  
蝶のまてらとよ移ゆけり 葱のまや  
初蝶もふておし 芥子この二年あか  
かやうらの中飛出うねる 胡蝶うね  
枯葉やまを舞ふころ移 一行こころ  
空を飛して 飛せりしき 胡蝶うね  
沖の蝶ひささとまてを移ゆり 我  
世の中やてまてとまてかともあれ

權琴 其角 柳風 園指 柳林 半殘 好春 炊玉 百歳 雪窓 尤誓 宗因

蝨

蜂

蛭

蝨のあそび 此なるふひそまそふ  
この蛇はふとこととて 網りうね  
人もまて長き日 飛たれ 蛇の声  
糸ささるら 蛇と一かやあじうる  
蜂の巢や 笛さるとて 花の盗まれを  
まうそしや 花汲ふ 蜂の往かへて  
山吹ふゆけり けしんて ちの声  
ちのの巢や 一回く ちの兒 牙  
野田村ふ蛭 あえり 花のとほ  
石一の清きまうれ やらきまうみ  
蛭らふ知けもまて ねまのくれ  
あまちつら 蛭まとうる 胡蝶うま

芭蕉 其角 星泉 乙列 杜洲 園風 沙鳥 蘭二 鬼貫 其角 造亭 巧真



# 蛙

古沈や蛙とひとむるのあと  
 よしきやまの林とひかきり  
 田の蛙や虹を脊負く啼く蛙  
 ちんちん蛙ふそめるうきここの角  
 松風とうらとてまなく蛙の家  
 山の井や墨のこころふく蛙  
 まつりて柳ふのあるかきりうき  
 まろくと我頬まのりこのをりうか  
 のろき蛙ゆつろまろふ鳴かきり  
 りらけふ蛙はくもふ浮きふうき  
 尾まきくまこ啼めぬ蛙うき  
 とまの江や火と焚舟ふろく蛙

芭蕉  
 嵐雪  
 去来  
 其角  
 丈草  
 杉風  
 工齋  
 嵐蘭  
 越人  
 仙化  
 蚊豆  
 天磨

# 田螺

# 蚕

とまの江や火と焚舟ふろく蛙  
 から井戸へといこころひく蛙うれ  
 糸の道ふすれもさく出のからり哉  
 袖よこそとらん田螺の海士のひぬとま  
 入るる蟹もあはれ田あしから  
 里人の脚おとくくる田あしから  
 行るの中ふまうや田螺とり  
 景政の片目とひろふたあし哉  
 孫ともの蚕中うき日向うき  
 産ておまを喰つてとまを蚕我  
 とまあろとまの羽かろく蚕

宗濑  
 鬼貫  
 宗因  
 芭蕉  
 丈草  
 嵐推  
 交浪  
 其角  
 其角  
 知足  
 陽和



若 鮎

鮎の子れ白奥かろるけうとる角  
多鮎ハ精の一嘴ハ足らぬあり  
水沈き一網の目ふき小鮎うき  
鮎小の田糸の帯次乳房のち

芭蕉 文磨 重政 素堂

飯 鮎

いひだこのかあいやめれて果るける  
飯鮎のおのれ豆うふ河内越

来山 沾徳

落 角

一の谷さやまの麻やあとり角  
角あちてたとみまきや庭の麻  
つのは落カカやあつるあけ女  
あつるあちて之日をうは男麻うね

一夢 琴風 近之 朱拙

佐保 姫

さかのひめや京ううへへの舟の母  
佐保姫のほくろ硯や筆の海

可理 如流

しつ ぎ

しつぎてふ字初らけは是のちあん付  
いそくくや大和四月こかきま  
昨よま貝酒ハれありしつと月  
待中の四月もをやうとる月

貞徳 鬼貫 言水 揚水

たき らま

そこうあたまこきまふたの嵐うね  
きまふたの自夜お徳ん葉は苗  
二月の雪とけておつるやとるも川  
まきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまき

芭蕉 蕭山 之次 惟然 平那



弥生

津國もやよひの海の道千筋  
三月やをけりしき世果下木  
さくらさくら弥生五日の志はま  
富士の海をて三月七日八日

器佐  
去来  
其角  
信德

左義長

左義長やことしの相次啼紙  
左義長のさくらもあたら

旭芳  
幸以

霞

小泊瀬中眼鏡もよその霧我  
あふさゆもくろや潮あはまう  
里かきとゆゆの人のほろりか  
行くて程のあつらぬきとめ

宗因  
鬼貫  
野水  
壘交

三帆舟と塩屋ふらうのほみう  
えうとよふを響らや一夕かき  
流るるや歩もゆるまこは  
破見清とまきうかきるま  
つこをまてかりうけか  
浦くの空お帆かろり  
我宿もよそよりのなれ  
八重かきと奥もて

嵐雪  
其角  
越人  
岩翁  
子英  
冰花  
風洗  
月下  
杜園



# 朧 月

唐寄の松と花よりおぼろしく  
 夏のしきま闇のあけくの朧月  
 大系舟舞の如く舞ふおぼろ月  
 おぼろ月おぼろをみされぬ夜中  
 をけ山や籠の月れとてとて  
 中川やけらうとらんてもおぼろ月  
 山のひやたけりへよりておぼろ月  
 夕かきとみくまて朧とまうく  
 おぼろ夜に白濁りのまじり  
 朧夜に酒あやうき人猿の声  
 ねあろうとて草花あやうき  
 朧くとりて火ふるや波のたし

芭蕉  
 去来  
 丈草  
 仙化  
 式之  
 嵐雪  
 兀峯  
 荒弾  
 支考  
 沾洲  
 支誓  
 鬼貫

# 凡 中

ゆり名は鮎や古郷のいろのほり  
 かりくや江戸がいろもね凡中  
 系はる人とおぼろ月やいろの  
 夕くれのいろきまやいろの  
 いろのほり雨のあしるか  
 いろのそりまもまもや際

示因  
 其角  
 嵐雪  
 支誓  
 ト  
 園風

# 叢 入

おぼろ月やひとらめさうやま  
 叢入や浅草うけて芝の海  
 おぼろ月やおぼろ月歌の酒は碎  
 叢のりや我我のいろあやうき  
 おぼろ月のあや小豆の老るうら

其角  
 琴風  
 専吟  
 咫尺  
 蓬村



飯

花もまた埋火の火さる飯まきの事  
ひまゝの佳村きー山とつら  
傍正の膳火さるまの飯寒く  
寮の戸付火辞ちひさね飯を  
去来 其用 野童 其村

冴返

雷やひとむらさあのさえか  
さえうへからととあつちさる  
去来 桃盛

燒冊

る帝て燒野のあられさあうれ  
はやくと燒冊け早きつひえ  
山さる小松の残る中け冊の  
乱糸 曲之 下木

雪間

光陰の天間あつる雪間あ本  
草莖と包むまも分れ雪雪哉  
醉とよて各葉摘まき雪間  
其角 万子

残雪

木枕の垢や伊吹あのとるゆき  
かきと消て富士を裸よ毛胞とり  
雪残る鬼獄さしき赤生う身  
舟くの小松小雪の残るけり  
軒の雪盗人の取のとり  
其角 言吃 且兼 復室

東風

徐々東風入る雲のりさきうれ  
暖簾よ東風ふくつせの出店  
去来 燕村



春風

春風や人声くもの影さか  
るる風ぬこころを羅の駕籠の尻  
まうせふねきりもささるね羽織哉  
えらう勢ふ吹出されたり水の胡蘆  
ける風や堀こしるるうーれ声  
世をうぬの法師の旗や春の風

芭蕉 菖子 亀翁 去来 来山 荻村

雪解

北國の雪買をたてんまの雪消成  
雪消て大声あつる小ちるる車  
松の雪ききえとや声をあけろ山  
雪しるるや蛤いりてあいのとを  
きゆる雨ハ氷も消くをへるるり  
氷消く風ぬおろれそあつるま

沼徳 柳隣 春洗 木白 路通 の

真雨

不世さうやかきとま直し真の雨  
たるまうつや田舎のちあいの鯉うり  
春あけあつるや軒中かくとま  
けるまうつや山より出れ雲の門  
ま雨や何うらいらん嵯山家戻り  
たるまあものさうあふ馬のけあけ我  
ま真まうつや九つあまる枕の南  
たるまあ守我ままうつひの行所  
けるまうつやややまきののま枯つじ  
ま真まあや枕くらねくううひ本  
状えらわ江戸も洋志りま真のあ  
春雨や急すう川人たつて急志り

芭蕉 史邦 村紅 後雖 丈草 堤亭 秋色 芥平 其角 支考 鬼貫 貞室



春 雪

暮 日 春 夜

酒壺をくちめられてゆきけり 暮の雪  
淡雪や雨ふちあふ 春の雪  
ふりけしことごとく 初と春の雪  
下流の氣をよけよ 暮のゆき  
かさ山やけしゆく 暮日  
暮の日や塵ふ 暮のゆき  
如意橋や 暮のゆき  
船橋も暮日ゆめく 暮のゆき  
暮の夜や草津と 暮のゆき  
春は夜も暮れは 暮のゆき

素山 風麥 直重 李由 貞室 鬼貫 其角 派徳 其角 蕪村

春 海

春の 月

暮 日

河海や古鼓ゆきゆく 暮のゆき  
えは行遠山 暮のゆき  
松崎や旭もゆく 暮のゆき  
暮の月琴子物かく 暮のゆき  
鹿うぐい 暮のゆき  
春月や下合堂の木 暮のゆき  
鐘はくぬささる 暮のゆき  
立鏡を淋し 暮のゆき  
赤猫のうぐい 暮のゆき  
菟や根ふささる 暮のゆき

素堂 芳川 不卜 其角 沾徳 蕪村 芭蕉 普船 山店 貞室



春の形

ふりあたる銀のひらりや春の形ら  
らるの野やらつれの竹ふくふとらん  
蝶の舞雀をとりたるまはれう有

杉風  
羽紅  
負室

春せう

たるの水も秋の木れをふとせええ  
春せうあうく社書の手紙にしらん  
物ゆるし一奥の兒をれまのあ

嵐  
其角  
沼徒

水ゆるむ

水ゆるむとろや手鍋もあがりあき  
汲み出しく髪とく水のゆるこく有

阿漕  
文水

海雲

りつくと海雲あま近き朝日こつあ  
まのあつあ海雲まらしうとらん概

峡水  
抱月

海苔

なまのりも海苔とら老の妻もせて  
海苔とくく水の名ふとくえ都る  
人のともまらるるのちや櫻のて  
まのりのやうしあふしらん磯刈雲

芭蕉  
其角  
杉峯  
尺草

寒食

寒食のさととみひしけふそあひた  
ひひの火もまき食の日も腹立そ  
まき食や旅人の雪の路まきえと  
今安ふとらん中食は家より自身ま

桐雨  
氷花  
月下  
其角

草餅

雨の多き餅とさくくや草の餅  
伊吹山あつる間おそし草餅  
らき餅やうあさしきも餅の白ひ

芭蕉  
政玄  
埋然



# 陽炎

枯せやうとうもろの一二す  
 うけろふの抱付のうろもろ  
 かまろふや出巖おこしけら  
 陽せやうのともつて度り駕  
 うけろふのまさし矢の沈む中比  
 おもろふの昼と夜中のをさう  
 陽せよ隣の葉と人ともふり  
 うけろふの障子のまろふ金屏風  
 陽炎の中小磯の砂もふきとて  
 かけろふは夕日にいそはけり我

芭蕉  
 越人  
 配力  
 去来  
 山に  
 達暑  
 犬舛  
 普船  
 其角  
 舟泉

# 系遊

系ゆのちむとひはけらるけろ  
 はしと系遊やまのむきとろ  
 ひと遊やまのきを藤の人仕  
 系ゆのやほをあひと体糞ひ  
 ひと遊のや左の人えらるまけの燭

芭蕉  
 方誓  
 乙羽  
 氷花  
 鋤立

# 二日灸

小窓 窓のまの日は二日灸  
 二日灸 窓のまの日は二日灸

その  
 几董

# 初午

初午やせん錢よみハ芝居くら  
 と初午やおせんつはちあひと  
 はつ初午や藤をくらえて戸  
 初初や雑多なうらつみ

其角  
 支考  
 野坡  
 川支



彼岸

御忌

夕の午やはらり小霞む通り筋  
 初午や毒の影まむ素浪人  
 夕の午や役の行者此あむぬ路次  
 初午やその家くの袖くみ  
 精進をまといわれ祝の日暮う  
 彼岸あくひうん橋のちりまきり  
 渡し舟武士はたきある彼岸式  
 携さくひくみ法陀のまうんか系  
 御忌まわり都小錦珠数袋  
 御忌の種ひくくや谷の氷まき  
 日小霞月小氷夕や山忌の鐘

左 圃  
 沾 徳  
 壺 月  
 薫 村  
 末 山  
 彫 崇  
 其 角  
 支 考  
 言 水  
 芝 村  
 儿 董

涅槃

西行

忌

神姫やわりのひもひきを涅槃像  
 さる母と小千と小物ととうま佛  
 孫子小ハとまきとてきん福とん我  
 きまきとたの日記もよや十五日  
 この心や常のちりまき涅槃像  
 ねとん命もはねらふ赤た日の光  
 天人も泣教とらう一徳とん徳  
 鈴鐘の文あむあられ涅槃像

西行の死出路を旅のはしあう  
 毎りよ彼岸さくくハ雲しふよる

芭 蕉  
 宗 因  
 菽 子  
 鬼 貫  
 野 水  
 言 水  
 已 百  
 希 卜  
 其 角  
 杜 若



永  
日  
き

永き日也遠近人とならふよや  
職法ののちをきるる日そ長き  
日さしはくまらるる速き瀬田の橋  
永き日也遊ひをるるり天津る  
なう死日や子小にぬいそ夕くそ

芭蕉  
元峯  
許六  
宗因  
鬼貫  
道春

出  
代

出かそりやその門よ維辰の市  
おぢや照日お下結ををりて行  
出かそりの間やあそふ氣のと死  
出かそりやにそは泊り遊女の果  
おぢりやあはのなるそをからけ者  
出かそり小園司王丸の鳥籠也

嵐雪  
知足  
浮萍  
幽山  
曇言  
肅山

雛

出かそりや人おくせりも連流うら  
おぢふかそりや髪女のゆいそ流  
出かそりやそるさめくと古葛籠  
草の戸もそみかそ代を雛の家  
紙うまてあそふや雛のあそとそ  
ころあそりや却のひるふ主婦連  
際く雛えまらあ小家う系  
ふことりて福ひまうさり多れ雛の只  
夫婦雛むそそえのとらけいそせん  
幼うぬぬりのあひなりうふの雛  
山崎の櫃ううくこよむさ遊ひ

其角  
木導  
荦村  
芭蕉  
車末  
鬼貫  
其角  
達暑  
霜白



鷄合

赤いのが五位様上りとり合  
勝鷄の世を苦んぢ抱ききり  
あやとりは獅子小まきりく逆毛共

其角  
言水  
君里

改下

現あふむ比目を踏んぢは下りね  
改下られて蟹の裾引なとりかぬ  
人うきむ舟と陸よめ改下り菊  
所川あ富士のかけた改下り火  
を渡りくふの改下りや田植と  
帯むと水川はあつたきほ下り  
響籠りて改下りのくん改下り  
仰ふく足めとはる改下りか茶

其角  
嵐雪  
友重  
圖指  
介我  
沾彼  
如泉  
桃女

馬刀

一の洲へ都の客と馬刀とりふ  
あ莖の馬刀うきよせん筆の靴

鬼貫  
嵐雪

曲水

曲水や岩かきりくみ峰のくま  
あふよ椿さうり山路の甫

其角  
希因  
大兔

畑打

畠らめおとや嵐のさくら麻  
ちかくと畑打そらやまきりみ風  
畠打や傍り雁はりのかきり  
畑らつやうこうね雲もなぐみりぬ  
もこおとけはれ文の爺や川向ひ  
加ら川やむらうら志賀の都

芭蕉  
好風  
路茨  
荻村  
秋之坊  
露



長閑

人の世や長閑な春日の寺林  
肩付の貴世ふありぬ冬閑の  
のころさを物もむりぬ朝露の  
長閑さや空ふらぐもるの声  
其角 冬文 杜園 雨什

刈霜

夕病みつれなき霜の別れの葉  
初夜埃の清つた中じり霜  
千那 松吟

峰入

峰入や一里おろけ小山伏  
うま入は花踏て刈素足う南  
孝入や雲ふ起卧とき人もあり  
芭蕉 六亀 重頼

行

夷

行まよやまの啼魚の目とまよみこ  
ゆくまよや猪を雄島のいとれ貝  
明ぬ間ハ星も嵐もまよるはりら  
初らまよ底のぬけまよ枝まよ有  
まらまよぬ名を引春や親あまよ  
引春お頬をなほかろり門う素  
ゆくまよもぬぬ野守う好  
行はまよやまよまよ鐘の声  
山 野水 鬼貫 芭蕉  
ゆくまよの夜をぬぬ敷の籬うら  
行まよや横河へのまよらまよの神  
暮四 支考 丈草 其角 芭蕉



古人續五言題發句集

夏之部

時鳥

うらひまの娘うらうねやとまき  
 口あつく水鷄ふなとく人郭公  
 ほとくまふ歩大井系をり月夜  
 夜の媛さりひ白一本まき  
 なつふまふ人あつうらうふ子規  
 たそくれん聲かつらひうらうたき  
 蜀魂よ川から淀の水うらう

守武  
 宗鑑  
 芭蕉  
 鬼貫  
 さて  
 負室  
 幽



在明のおりておこまやちとくまを  
御成筋のくけはをちを子規  
ほとくを神樂の中を海りり  
親を谷子山あのをほとくを  
泣けあまふ啼け郭公く  
村多その日くのちを孫の首  
杜宇とぬ夜かさくかくら我  
ううれ出く山久とをれ々蜀魂  
とひあんとまううみやこの子規  
馬とらぬうらりの合りのやうくを  
くくりのた力うあきまはくまを  
致をくまき麻さめうつや時を

其角  
嵐雪  
女札  
正由  
利冬  
尚白  
宗因  
去来  
犬草  
鈍可  
傘下  
一襲

ほとくまをとれくまの野の度々  
あひの子のほをぬきや郭公  
目あ青紫山やとくまはくを  
ほとくまはく一声まはく雀の声  
石昔の朝露かち一本とくまはく  
四五月のうらみさ浪や郭公  
あつとまを定まらぬ宵の電  
松島や松島をうれはとくまはく  
星の川啼うしあや馬鹿  
杜宇なう孫のうらぬ月夜うな  
湖をとくてくまやあつとくまを  
おほまてはくまをくまを

柳風  
松下  
素堂  
杉風  
惟然  
詩六  
卯七  
曾良  
團友  
朱拙  
樵先  
智月



左羽山花ぬけにほろろきる  
郭とあうねあきた朝然ら  
雨の間に常あきたりほろろ  
耐ふるまうねらうのをりも  
おりのひと心森とあはしよ  
啼くくまもたひくうおと  
付鳥窓らううしく人とも  
昔らもや舟形うーかれ子  
高きやあれこれ中の杜宇

野一坡  
支考  
風園  
荷分  
北枝  
正秀  
土芳  
素  
洒堂

閑古鳥

啼出してとめ口をきこぬか  
谷こーや空ふく風のうんこ  
閑古鳥の声お脈る山崎う  
なげの淋ー啼程の淋ーかん  
風ふうぬ森のあけしや閑古鳥  
極さくは山田も青ー宗古  
かんこも啼や蛙の目かりと  
草臥く芝母稀あし閑古

釣壺  
乙物  
鬼貫  
瓢界  
其角  
舟竹  
洒堂  
正秀

老鶯

山中やうらぬと差く小六ふし  
はまの似や春の鶯のうらこと

支考  
宗因



鶯  
を入

うらひさの音を入の中ニツ星  
鶯や春を啼こんと昔柳

嵐雪  
田水

鶯雀

あし鳥や日のきこ廻依夜の庵  
よききりも小野とへいし霞の中  
結まゝの海つとじ我をまきまじし

錦水  
行雲  
芭蕉

翡翠

河せみのとよよ麻てけ蓮り形  
翡翠平に折れけ電の交藤り糸

業言  
西花

羽  
抜

羽ぬけさる啼きさるりそりそと崎  
そころもの松となるや羽ぬけさる

其角  
希因

鶉

えんね鶉のちびら小りゆる無う糸  
鶉とともふとつゆの水をくくく行  
見物の火もえられとる歩り鶉なる  
簑笠もあら鶉はくひや川おどし  
曲江小舟のそえぬ鶉も糸の南  
先舟の歌もかまらぬ鶉糸か糸  
鶉はくひの斤手くささるるかす糸  
鶉縄むく淡まきやニとあり  
鶉数小早瀬とみゆる鶉うけ糸  
かすあまよえ面や鶉匠のうけをうり  
らもほろれ鶉洞か眠る夜明うた  
あまうち鶉とせり合はぬらあう糸

其角  
急貫  
去来  
李田  
梅鮎  
淳兒  
独卜  
桃隣  
園指  
琴風  
氷花  
尚白



# 水雞

雉さきてあまのりふおりの水雞な  
 おのかねの尾さあ鷓鴣の園  
 宿守の宿をくひらふよ回らうの  
 めらとりもをらうく耐る水雞はく  
 うへはより戻りかきとる鷓鴣我  
 宵の口啼くや曇るや鷓鴣ひる  
 水札啼て日乾ちろはく流る有  
 けりるのそ神やととまきるる水  
 らち川や雉の深巢ふなく蛙  
 龜の脊ふたさうの雉の海巢ふ  
 鴨此巢にまはさかさと小西る

土方  
 本草  
 芭蕉  
 去來  
 半殘  
 北枝  
 一泉  
 尚白  
 其角  
 肅山  
 一柁

# 水札

# あまの巢

# 螢

おのり火を木との螢や花の中と  
 ろるる火や吹ととまきれ雉の園  
 養ほくを朝くふるも螢う有  
 牛部をよるるを宿草のけらる地  
 桐のやあま自息さあうた螢うれ  
 草も木も螢くらまやあまの音  
 田の取は豆はくひりけらるる  
 かましとを牛ふらまきるる螢う  
 ろ級てぬれと袖のろるる角  
 あまの夜と下とくりり茶うさ  
 夕園とけらるるもあま酒をやし

芭蕉  
 去來  
 嵐雪  
 言水  
 本草  
 史邦  
 正秀  
 万平  
 猿維  
 踏歩  
 舎咭  
 水鷗



蝙蝠

水辺を舟をるる是のけりほくろく那  
菽垣や卒都婆のゆひを飛虫  
石山へまきこをねくまきあふはく有  
飛くけり筋ちつふなはる虫

宗因  
鬼貫  
嘉元  
袁左

科蟻

蝙蝠や宇治の晒よりとくろりて  
たう告り文うけけりおそくそ風  
かそありや向いの女房をちをんる  
蝙蝠や月のおあをりをまきくは

其角  
子英  
芸村  
曉臺

科蟻とくろや富士の裾野の小家より  
とんでとて近道とてるをありうね

芸村  
林秋

蛙

明松おあめを枯母なくけぬかへ侍  
あまかへる松を落く益もあ  
あふり啼とたけあふありあぬる

芭蕉  
其糟  
涼徳

ひき

ひきをふんてたへの卯は花をふのみ危  
夏まき耐ハおまの遠きも両夜哉

其角  
曾良

子子

子子や流くくあものらめとまき  
ほろりりのくくや浮世のくめせ貝

氷花  
重厚

蚤

蚤あふみ馬の尿をねはくくえ  
隙あまや蚤のゆく行耳の穴  
川越や蚤おつうあく横田川

芭蕉  
丈所  
彫棠



蠅

夏は  
母し

うたへの旅もなつらん木屑の蠅  
 かほ母はく飯粒そくよあくくきり  
 蠅まじうる眼よ力かたれたる麻うね  
 珠数くりて蠅打人の片手このみ  
 浦風やゆらうねる人のそるは際  
 そく打その手枕の縁うりこのま  
 うらうきまう子の息は蠅うこん  
 苦くさるや無業うけ行午の蠅  
 電のさきひひくくや火とりひー  
 のふ夜はや鳥もいねるお火取虫  
 夕立よとまうこまぬく火とり虫

芭蕉  
 嵐雪  
 子堂  
 西軒  
 依水  
 已百  
 紅雪  
 九節  
 犬草  
 翠袖  
 正秀

蚊

蚊  
粒

宵の蚊もほくくをこころ八声うね  
 蚊をよけて蚊の刺やほくききを  
 旅人やあうりき方の蚊はゆへん  
 血をまけりつとちりて蚊の傍さ  
 蚊の群きし柳の一木の曇きり  
 子やうんその子ねぬも蚊の合人  
 蚊のやせき鏡のうへふとまりけり  
 海やの蚊や御佛供焚くまおく行  
 蚊をころと中お蚊明る旅麻うね

蚊柱お大銀屑誘ふ夕部この角  
 蚊をころと中お蚊明る旅麻うね

其角  
 鬼貫  
 治荷  
 丈草  
 小春  
 嵐紫  
 一笑  
 鉤雪  
 昌碧  
 宗因  
 其角



蚊  
の

旅麻して香をうた草の蚊をり我  
故中り本や父行子女の石取うり  
蚊を火を麻ととろせまうなりあま  
うなり火や蚊をける方に老知とり  
指ろひー嵐も出くうり古の蚊をり  
草の戸を念佛の中もうなりを

去来  
嵐雪  
杏西  
其角  
鈍子  
三翁

蛭  
生

蝸牛角よりもけよ須磨明石  
批把の糸糸を直に角なき蝸牛  
世ふにれて踏みあまうへかとはあり  
あま露や角に目をめりうききあり  
蛭牛角をいふ夜のせよなり那  
我むうー踏みあまうへかとはあり

芭蕉  
其角  
大元  
嵐雪  
水鷗  
鬼貫

蟬

撞鐘もいふやうなり蟬のとを  
蟬の去りあま水の夕食るよたり  
ゆとりてよ半捨松ふせこの声  
さく蟬のその木あもま居つうぬ  
捕もうくやうなりせみのあを  
せこ啼や麦をうりおとここ三  
啞蟬のかうぬ梢もあは是なり  
月しろふ夢えて飛う蝶のこを  
せみなくやまをて眠る松の下  
吹あうそ風あたるもや蟬は麦  
蟬なくや市織窓の昏射る

芭蕉  
釣雪  
宗因  
鬼貫  
昌碧  
嵐雪  
杉風  
正秀  
可吟  
如行  
曉鳥



空

蝶

鹿の子

更衣

鬼灯のからをまはしや蝶のから  
 空せまや木の鳥居を啼捨し  
 蝶のからまはしやまはしやまはし  
 目の玉まはしやまはしやまはし  
 破垣やまはしと廉子のからし路  
 おそろしき角ふなりきし廉子か  
 鹿の子や寝ふ出まはし青鳥  
 一ッ脱くうしうふおしねるもか  
 はしよまはしやまはしや花の更衣  
 春と夏とまはしやまはしやまはし  
 鹿乃見まはしやまはしやまはし

其角  
 一井  
 旬空  
 卧高  
 曾良  
 柵雪  
 野坡  
 芭蕉  
 正式  
 鬼貫  
 宗因

ゆりのゆき布を賣をしとるもか  
 扇玉の暖を無きあらしとるもか  
 おそろしきまはしやまはし罪添し  
 帯あるしよまはしやまはし衣  
 又衣襷もまはしやまはし衣  
 まはしやまはしやまはし衣のへ  
 雲水小打込とるやまはし衣  
 とるも久をまはしやまはし衣  
 まはしやまはしやまはし衣  
 身をまはしやまはしやまはし衣  
 綿をぬく旅麻のせいとるも衣  
 とるも子やまはしやまはし衣かへ

杜園  
 嵐竹  
 その  
 一有  
 傘下  
 野坡  
 秋之坊  
 琴風  
 龜翁  
 且水  
 九節  
 尚白



給

獨を野ふとせしむれとありせしり有  
一日く花よとせしむれとありせしり有  
てらくくと空一志きり給う那  
給着るや十里とゆらん朝こころ  
初らくと木目んえとく給う那  
日ふかけて思きこめり色由似合危  
かこころの下れきかろ給う那

嵐雲 鬼貫 園友 独ト 此筋 湖水 素終

青簾

くあささらふ青まふかたれとせしり有  
其の終まらりのあれし青すし  
その日け縮妻とせしり有  
さうのまふ千尋の糸や青簾

月下 吟松 支治 希因

葵祭

くや夏の入一涼一青とせしり有  
まき簾くあを坊らもくあはし  
呉竹のよしの葵のまきりの有  
下くの下はかきも葵はつり

桃後 支考 携良 曉臺

まは

松原中田舎すはりのや昼休こ  
園くめのあふあふあやありま山  
新めてちやはるはつりの車我  
午時と実盛みなるあふう有  
平あふの祭入りのあはひう有  
あふうのあふあふあふあふ

空角 定克 白雲 玉笑 新美 古庭



卯月

ちりひ物と木芽や四月の櫻うり  
此ころの肌無き身ふあむ卯月うれ  
白雲のくくしや四白のすし山  
山城や卯月くくりの雛子のこゑ  
たましくふに日月とつむ五月この南  
かろく身を風のせむる五月哉  
六月や風あふる五月ふれきとく  
こゑの身やあそを流るる年をまれ  
あそ月や熱とくりの風ゆるき  
みな月や朝起しとく大書院  
六月や磯ふおりのけく夏とるひ

芭蕉 尚白 钱外 去来 鬼貫 素堂 杉風 惟然 怒風

臯月

水月

夏氣

夏書

灌佛

各を佛とくく夏のよめ夏氣なる  
花はみや先ゆく人を見のこ  
日次りてかえりる筆の夏書は  
はくくく夏とくのふて社命うき  
灌佛や雛子合とる散珠の音  
灌仏やまもとくけも二年紙  
灌佛のそのころ清くあつるまね  
灌仏やとく入相乃大はとけ  
灌佛やほしと並つる井戸の玉根

重則 言水 蕪村 兀峯 芭蕉 之道 尚白 百里 曲翠



見堂

七堂ふや希へ余何や急見堂  
脱捨と夏の住居や花見堂  
蹶つて軒をぬくやや見堂

麥林  
涼郁  
分江

新茶

法みそる袂をかへて新茶の好  
起くのち後夜宿の新茶の好

考逸  
舎羅

葉撰

栂の戸をうのふせかへて葉撰の好  
大藪はらうたかくと葉撰の好  
秋葉のそり端のりくとえりうま

嵐竹  
史邦  
山店

風呂

夏風呂や清水寺とよかれり  
風呂の茶は夏目もらじ細工の好

宗因  
重房

短夜

み〜夜やかめ五文字ふ明石得  
〜〜短夜二階〜〜上りきり  
短夜次吉ゆ〜冠者に各残り好  
〜〜夜や木賃もあま〜ととと  
み〜よやゆ〜白粧の香ハのとり  
〜〜秋の露さぬの里も朝露くれ  
短夜の声なま長〜馬ゆ〜  
み〜〜秋や百合咲く〜明あり  
〜〜の夜や〜火よ簾〜  
〜〜物よあま〜手筋や旅の爰  
み〜〜夜や小兒世明〜町〜

宗因  
末山  
其角  
惟然  
一帯  
千霍  
清門  
林陰  
且葉  
音霞  
荦村



小麦種

小角豆

行駒の小麦母なぐきむやうりう系  
はうみ合ふ子供のはやや麦とらけ  
地あうしやまうら小足も麦の秋  
家のしねの小麦種お出く夕日  
一袋とれや鳥羽田のことしき  
麦ら川や内外もなれた志賀の里  
あけ土よりの種とく麦一穂  
ゆふ雨小牛ぶようくる麦野う系  
燕や日りのけかとうれまうけ垣  
小角豆垣妹う垣扱のあまふあり  
とらけてるを中に集のたれまうけ我

芭蕉 游力 此筋 丈草 之道 重五 玄察 枳風  
鉤聖 心棘 龜翁

かんの

鮎

かんのを賣りいふがれ人を酔きん  
二の富の廓へおちと初かのを  
下部多のかのを食する日や佛  
麦出ても鮎よと食ふ山家うあ  
うをあるせんたれあや下しせひ  
漕はけと岸のたりのかのをこり肌  
かうひても先達船やうり門鯉  
やあまはくく夕をのかねは鮎治  
鮎捕やなれぬとりうと後うらも  
格上も鮎とひくくや毎のはゆ  
とらけても石ふなうや鮎の鮎

芭蕉 沾洲 嵐雪 花紅 百里 紫紅 岩翁 宗因  
宗因 新高 負道



蟬

幟

昔柴を蚊をみもはるや八瀬大赤  
管ふんや松よかやほふ昆陽沈  
らそら庭をさうー入れり悔の中  
蚊の声ふのれさきしてかやとく  
おは牙のさきみふや蚊をのそは

花あやめの色りもかをる嵐う船  
うのさりやとや帟や紙幟  
手云うとよまの穂えんて帟のり  
左右さふ横雲ううれおありう  
茶むしうの中ふまうる唇のりを

去夫  
鬼貫  
車末  
曲翠  
岩翁

其角  
宗因  
文鱗  
百里  
芦本

粽

菖蒲湯

葦原や豊の粽は國津風  
上うらけや粽のちとれやう  
あけやく小粽とくちりゆー中  
トさまの初物さやー柏ちり  
山笠のゆひあうーやちり亀  
物さーと粽を切やか乳六のり  
鏡りちりはあお出るは粽う有  
揚りうお唇あうらひくちり我

志やうふ入る湯次りひたり一鹽  
あけねよやうふの浴お蚊う途る

鬼貫  
西吟  
路通  
蓬西  
トく  
玉芙  
菴尺  
南盛

荷兮  
末山



印地  
らち

子小似るる子のかとうとや下地打  
かそしるの嵐と印地かちらう好  
年ふるまき人のと好しや下地打

仙地  
志  
溪石

競

馬

競馬場お入身のりきみかう那  
人の世もかうくしけくく人る  
競るおななはとらうとらな  
唐人よ一ははせくた競馬う好  
けしそふく房り陣の斬うな

其角  
山川  
土芝  
草士  
朱細

竹醉

日

西雲や竹も酔日の人あつち  
竹うらやまよのせくる茶碗酒

其角  
野坡

五

月

雨

さみとれふかきぬのりや徳田の梅  
五月のやや蛭刺のと何と縞の底  
さめを雨や酔るりのおちえりり  
五月雨ふ沈むや紀伊の八莊司  
はくそられたる武彦地の秋徳  
五月雨と堤やまきと一天の川  
さみとれ何をさふ汲深の人  
五月雨の柳まきりまされ汀う氣  
牛もかきしを羽のあつり此五月雨  
海山よさみくれそらや下らふみ  
かほぬら田子のりさそや五月雨  
五月雨や柱目か出と市の家

芭蕉  
嵐雪  
鬼貫  
去来  
宗因  
望一  
鞭石  
一龍  
一鬘  
九飛  
其角  
松芳



五月雨の多や淀川丈井川  
頭をさけて馬もあせりや五月雨  
はみよはよ持めりうらなをこころ

挑 蔭  
荊 口  
里 東

夕立のかしら入と候はりりう  
宮崎や岩とて雲を入梅あり  
双六の相争候とてはりりかき  
桐亀持夜まを起とほりり我  
松風や入梅ふりり日の交曇り

丈 草  
養 浩  
胡 及  
銭 堂  
文 丸

虎々

虎う袖とらよあやふ降る候  
降りの中ゆる死名や虎う雨

鬼 貫  
一 声

入梅

五月  
園

五月に園あ難とらなり人の家  
たらしし峯ふも結とく五と雲  
さけも争ひ挑の虫をもたう人う

舟 泉  
搦 志  
樹 下

夏  
の  
日

夏の日お癒き餘のりやう那  
なみの日やうとて死とよみう那  
る夏は日をもすとも勝田のあのみ

嵐 雪  
文 里  
鬼 貫

夏  
の  
月

蛸壺やとう好ふ夢をたるの月  
明くのか家お伏見や夏の月  
あらの扱や東へかりし月を西  
城下や笛きうとめくありの月  
たあれは酒もさるる夏は月

芭 蕉  
嵐 雪  
宗 因  
露 白  
桃 蔭



夏野

なみの山

火串

馬ほくし我と終ふえる夏野うた  
 枯きと麦とくまのふ交野か  
 揃ふと音や夏野のまりくを  
 うつちの荒く望し死を野れ  
 なみの山やくも井ふはる響の  
 花をくむけふ夏山の柴く  
 なつらまはあまの花屏風う那  
 雲雀啼くめと物とと一夏の山  
 うのほ木の鬼をおそれとり一  
 照射る念佛の上を透ひま  
 瓊は斬やかつと坐りや枝

芭蕉 生林 元灌 史邦 支考 鬼考 宗因 卧高 牛角 秋風 露宿

やま

田植

投らまてりうき命や桑の點  
 目通りののをうの榎や桑さうい

此筋 其角

牛あうは声もくろしき田植う  
 渺くくと流あうある田植う  
 板なりふせりあうりう田植う  
 音響やせうんあうりう田植う  
 津くくと苗うのまめう田植う  
 露のふあか電おさくう田う急哉  
 山吹も巴もあうく田う急う那  
 菅あまのちを脛よりそ田植う  
 白きけ声か尾のあう田植う  
 風流のをしめや奥の田植う

膏車 曲水 丈草 正秀 示蜂 立竺 詩六 鬼貫 芭蕉



早乙女

早乙女かへく取くる菜飯を  
志はくも早乙女くふ清田の  
早乙女の手てせくりのよ川は支  
明る戸や子乙女ぬゆる其隣

嵐雪  
景道  
彫棠  
百里

早苗

西う東うまゝ早苗あも風は音  
菩薩とくまゝくや及の飾り苗  
燕の下腹さくはさるくこの郡  
ゆめくけや初まきまゝる早苗  
ふとる身の植おられくは早苗  
頃れく棒入けり早苗うち  
とらうく雲ある谷の早苗くれ

芭蕉  
乙別  
胡布  
冬市  
魚白  
琴風  
紅糸

青田

里の子う燕撫るさるくこの有  
親は日の寺へ助くは早苗くれ

支考  
臥菖

谷風や青田を廻は菴の客  
畔豆もまもみ潤く青田うな  
ぬれ髪はまうまよ門の青田う那  
糸啼てあともまらうるま田  
涼くまや八人代の田はあをみ  
橋の小島の崎も青田うな

犬草  
楚舟  
汀鶴  
桃隣  
荒雀  
知足

田草

はき橋や田草もまらぬく水  
田のくまよあまれく富士詣

山店  
奚魚



扇子

捨合ふ十二の骨のあつたの那  
まさまいふ旅の跡ふむ扇うれ  
さうはまや扇ふけてまよと涼し  
ゆらまきと饅頭おのきあまき我  
扇折子ふまふき化粧うさ  
小敷ふけく肌のはあつた扇うね

守武  
宗因  
夫叶  
草士  
尚白  
泉門

窓扇

あつてくしんくろ王地まあ良園  
青丹より白たうちのなまら窓  
らまらあふうちのあさの白いれ  
かまきよりの男まはまはらちの  
傍草ふらちのさし物おちうさ

宗因  
来山  
其角  
玄志  
一峰

紙帳

夜より窓へ紙帳か風か入る音  
改めくらしんかかくる紙帳うさ  
おのふこと帝帳かうけと送りさ

其角  
貞長  
野徑

帷子

かこひらの四五六月のまみり  
帷子ふあうゆりまら日出る那  
うこゆや佐保と龍田の宮は姫

宗鑑  
丈草  
青娥

祇園會

祇園會の山路より入る大はな  
まらとや山木はある祇園の會  
祇園會や林のまら手向止  
まらまらまら踊るやまら人の會

宗因  
梅盛  
如貞  
嵐雪



水室

水の奥水室より川ぬる柳の那  
らりはめて千年あねる水室山  
ありこそや家も冷水中りも

芭蕉  
貞室  
溪石

雲の峰

湖や暑ををいひくものみ松  
雲の峰なるんや嵐くくくても  
夕ら終りや瓦うらひくは雲の嶺  
くもの峰空ふらぬのりやはれぬ  
柴刈くくわるうもあふんまの峰  
雲の峰腰くけあふくくむなれ

芭蕉  
鬼貫  
去来  
桐雨  
明水  
野

雨乞

雨乞小先まかあややあまの  
あま乞や近江となりし川の敷

本草  
乙列

昼寐

山人の昼寐を志す葛のほら  
かすひらの洗濯まへのむる寐うれ  
まてくふ額あきゆる昼寐うれ

挑妖  
昨非  
る仰

土用

白雲の天社源平土用う那  
寒晒し土用の中炊はうりか家

望一  
許六

虫了

捨人や木草にかきて土用了  
のりかた時代よ逢や土用やし  
らたり香や虫了もせしむるをの  
内張の銭けあふきや土用月一  
虫けりやせめて夏あは清える

其角  
杉風  
卜  
理性軒  
肅山



# 暑

あつき日瓜海ふ入り寂上川  
 焼豆腐肉はくそあつき夕日うね  
 其舞の二家あふうらねあ川まう那  
 とん庭の砂あつうねりてう素  
 ち終んこの藪ふく風そあうりし  
 かんところあ暑りと石の壁とく  
 照付てあうりもあう海のうへ  
 毒もありふもあ体宿のあつき我  
 及ころう蚕と臭のあつはね  
 元山はちうらあうらぬあ川ま  
 粉あなれ蛇もよるの暑しの素  
 馬の目はあうらあ暑る暑うね

芭蕉 宗因 去来 荷兮 野重 鬼貫 嵐雪 氷花 許六 猿 里東 牧童

あつさ少小雀足幼くあつさこの那  
 田の草はたふあつさあ川ま  
 蝉なうてう人駕もなれあつさうら  
 年まよとと晩日の縮は暑うね  
 並松をえうて町のあつさか有  
 草の戸やあつさあ月あ取うと  
 名草の内乃あつさや棒はうい  
 積あけて暑りあつさとあつさうね  
 平日の朝寐あつさあつさあつさ  
 空しうら水てあつさあつさあつさ  
 村西の木城あつさあつさあつさ  
 めんき日も擬の木はまの夕日哉

屏壁 之道 探志 溪石 卧高 我峯 乙洲 草袋 蓬船 行秀 其角 素堂



夕立

夕立の雲もかゝらむとるをの空  
ゆふさきのまよや何處よ下詠をうん  
白雨や障子かけしを片むをし  
ゆふさきのまよの月や松の上  
夕立らに初より外なるとんまうお  
ゆふさきの下傘ぬぐ垣總の那  
ふ雨の跡おり後や堺うら  
夕立お追らむとるをや村うら  
ゆふさきのや鐘もまよは涙一守  
ゆふさきのや坂行駕おれとどろ  
ふあふさしれえはあふさし  
夕立らの原おあぬとれ枯木うら

去来 鬼貫 嵐雪 文性 其角 傘下 愚哉 隨友 仙化 山川 泊蓬 荆白

簞

竹奴人

ゆふさきのあまの降と静なるを  
白雨のさよけはあれた山お上  
夕立お跡入て廻る山田かな  
ゆふさきのやとまわれ牛の門ち久  
夕立や檜の臭の匂とまきり

も羅 昌房 子祐 李下 以肩

江山や江津の岸月をさむひうら  
さるまみや近江おりて夜 簞

宗因 其角

ゆふさきの人も枕敷なり竹婦人  
抱おすや妻かへさきりふらふ

卯七 其角



涼

破風くらり日影やよろとれ夕涼  
涼しきふ復れとね木蔭うら  
とととして涼しや宿の這入くら  
夕涼夜風とまりにたうとふ涼なる  
かけ涼し招承さして落日和  
ちね人か蒲団火にさしみか  
犬ふぬた風追ふ秋のそしみ哉  
とじさのかまのれや夜半れ色  
翠簾うけて経妻なうと涼三舟  
水と羽と合せ行勢や夕さしみ  
心屏風小山里さじ腹の上  
おもつとのくふ達たり夕さしみ

芭蕉  
玄旨  
荷翁  
去来  
宗因  
鬼貫  
嵐雪  
貞室  
秋色  
沾徳  
犬草  
城風

とらしまや掃の下ゆく夕のおと  
涼しは風口をひてめは川垣の  
桃燈のともやらゆじさしみ  
船涼三鴨ふかまじと沖へゆく  
管涼し摺りのそく茶の白ひ  
我舟と涼むさまかり涼し守り  
洋や磯さうと川さしみ  
とらしまや帆は船のちりし髪  
琴ひりて老をかませよ夕す  
牛ぬか合夜そ朝露夕さしみ  
とらしまやうらうら夕さしみ  
涼しは夕す川は夕さしみの口け砂

似  
未  
ト  
枳  
巴  
ト  
柴  
其  
智  
交  
里  
旬  
空



風薰

行水

このあつり二三の月りし梅すくさる  
おもとれぬ木城ささくや風の香  
かきしらぬ脊中ふくゆる涼みう那  
ころのねくも尻尻吹さるすすみろ  
故面をぬき窓一皮涼む戸は我  
ささくきき物いし声さ瓜の小玉  
けく浪や風の薫りの相ささし  
目ふ耳ふあめうね風はかきりぬ  
帆をかふる颯のはくさや風薫る  
うら水ふのこねさみや梅乃中  
あつ川やささの垣穂ふ夏の月

野 山 衛 一 土 鉤  
 坡 川 則 笑 芳 壺  
芭蕉 鬼貫 其角 又草 身袋

心太

菜瓜

沖繪

かきや紙園とやふふとくし  
丑鐘ふ駒のけあけやととてん  
多門のららけ呼せんともてん

芭蕉 其角 序令

柳ららけ何と涼とらま菜  
児のまけ玉ふもあめさ菜うさ  
白くてもめき味やまら瓜  
あつくけさ菜もみえぬ暑哉  
茶けらりけと洗さる真菜瓜

芭蕉 嵐雪 鬼貫 去来 正秀

酢徒利水さあやちと沖繪  
沖繪ふれさりてりさるよ

芭蕉 曉臺



漢  
有

城ありて井の清水まらぬ人  
援よりなりて無きもの片草鞋  
まぬくひの雪もあつねをるるれ  
六玉川高野の外に清き水あり  
さみきりて塩丁の沖に清水哉  
帷子ハ沙汰をたてゆき志す月うら  
遠き山をたつとふしきも清水あり  
連ぬよこまきせて結ぶ志す月うら  
松風よ巻のけよは清水の南  
我跡へ鉄屑たちよる清水あり  
山麓や志す月うら音長かた  
海ひと見ておこ立座る清水あり

芭蕉  
嵐雪  
宗因  
去来  
俊似  
尚白  
一髪  
一文  
一道  
許六  
西土  
嵐水

晒  
井

汗  
拭

旅人の足あとよるる清水あり  
あふみの跡の清水のあつね  
此夏の縁に下ゆき志す月うら  
落合とく言ひなりし清水あり  
はら井や底より寒い人の声  
きりし水の清き水のあり  
さらし井や男をるる志す月  
尋常の和巾をるまきや汗拭ひ  
扇折いし月うら志す月うら  
生の松竹に志す月うら汗拭ひ

山化  
其月  
沾徒  
蕪村  
桐雨  
嵐雪  
淡々  
嵐空  
弁那  
其角



夏瘦

夏やせふ能因あつり小食あり  
なり瘦と云さる人と云く是れ也  
る門やせやるは唐士の半妃うふ

其角  
風子  
友諱

川狩

川狩やまのらし流る手柄をる  
川より舟をこし小流お支涼之

我峯  
愚心

秋近

秋のいとまよふ秋近一故とん  
飛かへはしんはのまも秋ちし

此筋  
涼帝

不二詣

ふふ雪小夏き暑流に富士詣  
用帽子雪共周むやあー詣  
武工も川越とあふ富士まらへ

其角  
素堂  
定琴

法被

人並の端をも越ちり御被川  
可及らるひ目の行方や流路島  
破は扇一度お流を御被う南  
吹陣の合羽はそまうを死川  
らる舟はしと腐とりのまう被川

其角  
未学  
琴風

舟

宗法

舟の若くは舟摺寄しと川嶽山  
うはと舟よとんよまふ舟起死  
舟のそまふ隣お舟やわれ嵐  
舟は若くは雨のあつり舟皆の跳  
うのそまふ舟のあつり舟曇うれ  
舟は舟の舟をたかとの舟の舟  
うのそまふ舟の舟をたかとの舟

去来  
杖風  
之道  
楚舟  
支考  
土芳  
野坡



若葉

あつた雨ふ降くくね格極の若葉家哉  
ゆき一室にさる葉の厚云はあきやうに  
ひとしきれ掃さうら清くつらとか那  
よあしをいそいで笑さうたあふらな  
おりのひこめてみるささのあふふ哉  
とさふふと風やあふと時刻よ  
非情よか毛泳き枇杷のあふふ  
まことつらと我ハ身延のあふとん人  
まりの株のあふとをさるねの極のあふ  
若葉あうらさうらあふあふのあふ木う那  
夕まふらうあふのあふの若葉う那

素堂 其角 楚舟 定良 宗因 嵐雪 鬼貫 敬西 不交 藤蔭 新

若楓

僧心の青ねおと人やまうかかく  
物食のあふむらあふらやまうら 楓  
馬ゆあふらう折くやわうかくて  
さうけなやあふ事うさうわう 楓

信角 嵐竹 卓袋 兎琴

若櫻

葉はうらにふゆらや鞍のあふ  
あふとりの散のうらても極う那  
えさうさうやあふあふあふのうとさう死

鬼貫 沾荷 蝶羽

若櫻

さうらあふ実あふふて暖いあふの山  
山極 實あふあふとあふもあふ

一鼓 彫棠



茂里

嵐山藪の茂りや嵐ねささ  
川草のふきささる白ふ茂りかた  
神くくと春日はけりてはくらすぬ  
ちけりゆく草津の蛇や鏡の晴  
光こゆふの山は志きりこの那  
花のあふ今初ハ確ふとの茂り我

芭蕉  
嵐雪  
鬼貫  
宗因  
去来  
子珊

夏木立

よりのし椎の木もあり夏木立  
にそだの本社らしつらなる木立  
鷺の羽は浅黄小吹くや夏木立  
夏木立ちとささる木はくま猿の声  
蜘蛛の巣のあつきりのさうり夏木立

芭蕉  
昌維  
希因  
安枝  
鬼貫

下園

須磨寺小頼ね笛きく木下園  
芳雨丹木の下園は帟帳の糸  
下園や牛せ御前を履へら

芭蕉  
嵐雪  
百里

青嵐

うき雲や花有ふ別きて青嵐  
麻路巾吹落しきりまをあらし  
色としはさうりさうりあを嵐  
雨をねて松の白ひや青あらし  
梢あを破風のさりやあを嵐

史邦  
巴流  
嵐雪  
支流  
百里

常盤木

松風の落葉から水の音さうり  
夏さうりふきささるふめさうりも常盤木

芭蕉  
負室



桐の  
花

かみまりのなぐと曇りし桐の花  
桐の花青そら見えそこのはねの  
堀こしふ大工はくしやまりの花  
此うなり降る南やまりの花  
茂る木の中ふかり西桐の花  
袖の花昔ちん料理の写  
ゆはちや夜へりるついであり  
行ふもつはふ袖とあるひとと  
袖つゆよ沈名あこ酔ひうし  
蓋とれら蚊の飛井戸や夏折  
脱ふめて風は後ありるん折

史部  
猿友  
子兼  
トシ

花  
袖

夏  
梅

青  
梅

櫻

栗  
花

青梅やたのれう空ふ花はまき  
まのちや乳母うま妻のあかくし  
あを梅やそまよりりれい寝履

岩泉  
幽光  
入松

櫻佩てつととめうしやあは者  
干物のあしうあつしやるる櫻  
うきまきやあちのちまき声  
温飽打とまのちりあちあち花  
水まきこのもつ櫻のとうなの花

嵐雪  
白雪  
園友  
素寛  
平吉

世のくはるりねるあや朝の栗  
湖はなまきけりちるや栗花な

芭蕉  
胤弾



合歡

象深や雨よ西遊り孫ふのち  
合歡の本はねうをねむ清き水

芭蕉  
仙花

覆

盆子

枝椀や付るる一とらいつらと  
手の跡を忘れず甲斐のいつらと  
鼻紙の覆ふ盆子雨降るを  
水うれば遊とりのまぐいところ  
井の底は蛇を忘るへー蔓いつらと

重則  
陳由  
朱由  
杜由  
山川

まある  
ねむ

古寺や傍るぬめりと椀掴のむ  
掃とりのかとい日和くまあるはねむ

王園  
度江

柿の巻

此中の古木のつれかきのと那  
椀は花蟻のちくくとく休るを

此第  
可也

百日紅

さねうとも花ふはあぬ百日紅  
ありふるとや百日紅の教の日まそ

其角  
支考

燕  
花子

杜若もよおし祭合はれひあり  
とねはつと蛇のゆくとやかまうら  
中とれぬはつれふとくよ杜若  
獨ある子はつとせのち門も  
植るり子うぬ燕さきめ燕子花  
吾をるは下もかく形りうなる

芭蕉  
夫草  
嵐堂  
周也  
桃雨  
成之



# 牡丹

寒うらぬまゝ牡丹のちねの嶺  
 土嘗くともふかむらぬ牡丹うな  
 我う身の細うなりやほいん細  
 咲あがりふるんま寺れ牡丹  
 蟻獨もまゝまりかゝるんうら  
 一先のほいん嶺うらまう素  
 牡丹ふふらんとりとよれ唐糸哉  
 頭判の袖ととらきんちんうら  
 鳥の起川牡丹のはちみひくを  
 誰宿そ穴唄きまゝの紅ちん

芭蕉  
 嵐雪  
 鬼貫  
 一井  
 許六  
 路健  
 挑隣  
 猿雖  
 瀟波  
 毛紙

# 芍薬

芍薬も紅とりの紅とちねれり  
 寸陰もとらむ芍薬の花えう那  
 夏の穂や芍薬埋む里のせと

紫江  
 有也  
 自笑

# 葵

刺さけの葵ととらむ鳥帽子の  
 野草あふ大のそらう葵の南  
 おも瘦であひつけける髪らに  
 螢えー一雨は夕紅ちんあめい

魯丁  
 岩泉  
 荷兮  
 仙化

# 苔の花

軽け卵もまゝいりて苔のそら  
 くらせく跡て咲ちりあけの花

野坡  
 未因



# 芥子

白芥子や耐西の花北咲はく人  
 給出せむさくけーのひとそまる  
 秘宗の一下濱留字そ芥子の花  
 芥子教く直ふ実をえる夕う那  
 ちるさひ井見そ拾ひぬけーの花  
 人のさと教くそそわぬ芥子花  
 咲ふちうらうらひまおまきけーの白田哉  
 まさちうらや馬蹴やまどむる這の芥子  
 大粒を雨ふとく人ーけーのさう那  
 いく同との世ふまうわのこまーの冬  
 京出く泊りよと中芥子けを那  
 青くまき白ひもゆじけー乃花

芭蕉 表山 去来 李桃 吉次 洋水 傘下 次草 東巡 支考 里東 嵐藪

# あまみ

# 竹 子

荊のさう船裾まうどじかり旅とらも  
 なまけらまき名成らひひもせとる荊

嵐雪 風睡

竹の子や雪深おまて嘆哉の坊  
 筆やかり藤の床はまめよりも  
 あま月の竹は子うれー竹生時  
 子おはねてあるまきや去年の竹  
 垣根こー竹の子沢く既この那  
 竹の子や境目もあふと二重生  
 とけの子はちうらを流またとあまき  
 筍のちうらけまきかあをりか南  
 下りあま竹の子盗むあよりうれ

嵐雪 鬼貫 去来 次草 全峯 智月 凡兆 猿 玄梅



落

のらふまうて落の葉あふりのおふくとも  
草外やふまきのあふりのの葉あふり  
子小あまうとりふの迹はあまきあかり

里東  
浜村  
乙洲

茄子

昔のまうと青あまうらやあまうら汁  
赤味あまあうれまうらま初茄子  
一本の茄子もあまうらあまひうら  
神あまあまあまひうらあまひうら  
あまうらせん 藜の杖よなる日まう  
元政の軒かろうらあまうらあまうら

芭蕉  
北枝  
杏西  
園友

芭蕉  
西霍

紅の葉

紅の葉も海のかさりのや朝態あま  
きうあうねまこれうらやあまあま

去来  
山本

夏

果

蠅かうらあまあまあまあまあま  
夏果やあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあま

甚南  
拙候  
をんる  
旭芳

撫子

あまあまあまあまあまあまあま  
撫子あまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあま

越人  
嵐蘭  
猿雖



# 百合

花を女れとかく浮世とくつるま百合  
姫ゆりやうくよりわりの体は花の心  
餘りのの箱ふさのうり百合のいね  
さみられふおもたしゆりれいさ  
草ゆりや百合と中く花の歌

宗因  
素新  
嵐雪  
破笠  
半残

# 橋

後河路やうね橋も茶の白ひ  
あを海を渡るもとをねの起てりそ  
たらしおやうの橋とくえんしん  
橋やあうふおちう海をの糞  
あけりのと橋くら一旅とくこ

芭蕉  
鬼貫  
木因  
桃隣  
我奉

# 昼顔

ひるのちよ米橋歩むあつさあり  
豆敷よひとあまきよ一筆の跡  
初雪白や夏山伏の峰はくさひ  
登る月やまに川く馬をまをさけ  
枯柴よ昼う月異一定のまめ  
ひるの月やしんは雲れとも花はくり  
登るちよ風のとさやあまのうめと

芭蕉  
野取  
支考  
桃隣  
斜嶺  
沽圃  
嵐蘭

# 藻の 盆

藻のちねをかんする蜜の蜂受丸  
盆藻てる湖水あらまきるや夜の山  
潮引く藻の盆をちねの那  
藻はもとのとまねくや泡の上

胡及  
秋風  
見竹  
桃隣



櫻  
麻

まぬきて中てくくらんはく小麻  
行ぬけの家ゆつじや何雨き  
三日月はらうあて居るはく麻  
いふしははらふらん様あき  
誰あけは衝あらんさく麻

青  
一  
嵐  
杜  
普  
人  
笑  
格  
人

紫  
陽  
室

紫陽花やかたつら対の落沙  
あちまぬとみ器よりのや竹  
紫陽花の目くくの山ひら  
あちまぬとみ安き扉う  
常くえよ名もあちまぬの巻  
紫陽花や酒のらわく空の久

芭  
嵐  
梅  
伯  
為  
希  
蕉  
雪  
扇  
之  
松  
因

萱  
艸

せめてさく人のまふくまされ艸  
任の誰そ家よ花まく草

未  
燈  
山  
外

あ  
免  
や

あちまぬとみ五天のあやめ  
あちまぬとみ也あちまぬけり  
あちまぬの長くふあやめ  
葉の附る根とれら草蒲ら  
あやめと軒さく人のほりて我  
五日うてあちまぬあやめ  
馬あちまぬ侍まはしあやめ  
片をれのあやめのあちまぬ

芭  
鬼  
嵐  
如  
荷  
柳  
仙  
子  
蕉  
貫  
雪  
泉  
兮  
隣  
化  
珊



# 夕顔

夕うほや秋の夕うくの飄の南  
 ゆうほたるまの皮は鹿目我  
 夕顔や名をおとさるむの形  
 ゆうほの志をむかひの志をねん  
 夕白や香かくやとのまうふあ  
 山崎まで夕うほはるる世中う那  
 夕うほや一挺のほ夏豆腐  
 ゆうほや一目のこころ船の中と  
 夕うほの言を所ふままりま  
 ゆうほはれおえの気や油賣  
 夕顔やあつりとえね山炭うら

芭蕉 宗因 去来 野水 大町 市柳 許六 甚角 堤亭 詩六 杉風

# 萍

萍の寒もらまきよーあうあや  
 鯉とんで萍のまねうせふま  
 うきうきや菴まうと川まき  
 菴まきとけまきまきの海まうく  
 泥亀やまきまきのまきまき

嵐雪 つぶ女 柴紫 知足 蝶羽

# 河骨

河骨や終ふひうね花はうと  
 川や細や掃か網めは夜半ま  
 かのほ終の二本まうや西の中

素堂 嵐雪 蕪村

# 蓴菜

蓴菜の名は人めくものれま  
 蓴さふやまきよー敏ある水ま

万子 太抵



# 蓮

さらかくと蓮ととうとらけの亀  
 浦舟の頭るる一白ふとらとら  
 痛てうと人蓮ふ誘ふ朝海け  
 しく起やあしくる蓮敷らと  
 蓮の花らるや八島のこころれは  
 客ある一昔ふ蓮の塊追りん  
 ちとの香や田は仕行る水の跡  
 蓮ふん日る月代をうはくとも  
 鱈のふて蓮ふららふことおる  
 吹散りてあの人かをらとか  
 笠をまてみなく蓮ふあふ危

鬼貫  
 夫草  
 其角  
 玄梅  
 史邦  
 良品  
 沾徳  
 晨風  
 自悦  
 正秀  
 古梵

# 蓮葉

浮葉あま葉此蓮の風情さうん  
 ぐとこのあやふむのとさきあま

素堂  
 白雪

# 沢原

沢原のあまうさきさるあめさう  
 中を盡よあめさう細く笑あま  
 おもあまや千住の片端え知こし

嵐雪  
 鬼貫  
 朝叟

# 菖の花

むのまおあまうさきさるあめさう  
 菖花あまや涙あまうさきさるあめさう

此筋  
 鈍可

# 菖薙刈

鴨の子や袋あま入るさうまも刈  
 このあまおくけりまを沈よ刈まも

邑姿  
 且菖



若

林檎

若竹の背の若くしてゆく若のえん  
昼撞や若竹そよぐ山はとど  
下ろくふとりの若竹の若き若く若  
若竹や西追ふ風はそとむこ  
若竹や水の中でのそよぐ若  
若竹の香はあつた若く若  
若竹のうら若め若く若く若  
若く若く若く若く若く若く若

宗因  
丈草  
仙花  
路徑  
和泉  
百里  
龜洞  
車未  
其角  
百里

柳  
若く若く若く若く若く若く若

三ノ男

三ノ雄

娘花堂

三ノ男



